

『春恋』

著：朝丘 昶

ill：小椋ムク

「いたっ」

アキが頬を押さえて俺を睨む。

「痛いぞ」

動揺したけど俺は突っ張って、

「ただの、シャーペンの芯じゃん」

とそっぽを向いた。

投げやりな口調だったかもしれない。

アキはとうとう怒鳴ってきた。

「人を傷つけたら『ごめんなさい』だろうが」

俺も「はあ？」と憤(ふん)慨(がい)して食らいつく。

「傷ってほどかよ、その程度で傷なんて言われたくねえな」

「傷ついただけろう？ 見てみろ、ほら」

「どうにもなってねえよ、ばかじゃないの」

指で示された箇所を見てもほんのちょっと赤くなっているだけだ。

俺はつんとアキから視線を外して問題集に目を落とした。

アキも鬱積が胸の奥で暴走したまま憤(いきどお)っているらしく、勉強を再開した俺を横からじっと睨んでいる。

「……あ、そう。じゃあどういことが傷なんだ？ おまえの傷はなんなんだよ」

俺に顔を近づけてアキが薄く嘲(あざ)笑(わら)う。嫌味な笑みの中に昨日の一件がちらついていた。

“ひとみといたところを見たからって八つ当たりしてくるな”とアキは言いたいのだ。そして俺をばかにしている。

「知らねえな！ 俺はシャーペンの芯が当たったくらいでがたがた言うひ弱なあんたとは違うからな！」

「じゃあどんな傷も耐えられる気丈な美里君はなにがそんなに不愉快なんですかね？ 今日は会った時からまともに顔も見ないで頑固に頑張っちゃって。正直に言ってみろよ、それってもしかして昨日会ったせい？」

……言ったな。絶対話題にしたくなかったのに“昨日”って。

「昨日のことなんて、忘れた」

言葉とは裏腹に、アキとひとみさんの姿が脳内を埋め尽くしていった。

CDショップの試聴コーナーでアキが彼女に優しくヘッドフォンをかけてあげる仕草、微笑み合った二人の表情、俺の知らないアキの優しさ、好きな人に対するアキの接し方、

視線。

昨日からずっと脳内を巡り続けていた記憶だった。

アキが大事に想って大切に触れているのがあの人で、アキを想って触っていいのもあの人で、アキの身体にキスしてもいいのもあの人だけで、俺の入る隙(すき)間(ま)はどこにもなかった距離感。

俺という時のアキは、俺を嘲(あざけ)ることでしか笑ってくれない。そういうふうには俺はアキを楽しませられない、この現実。

アキは俺の髪を掴んで強引に向かい合わせてきた。

「この顔が“忘れた”って顔かよ。いい加減にしろよ？ つまらないことでいちいち不機嫌になったり八つ当たりされたりしてたら、こっちだって面白くないだよ」

俺は痛みを耐えて見返した。

アキにとっては俺の気持ちなんてゴミみたいなものだろうけど、そのゴミだって行き場所を求めているんだよ。ずっと一緒にいてくれとか、彼女と別れてくれとか、そんな鬱陶しいこと言わないしちゃんと諦めるつもりでいるじゃないか。このゴミみたいな想いをアキの中に入れてくれなんて、俺は一度も頼んだことないじゃないか。だから消えるまで、消せるまで、そっとしておいてくれたっていいじゃないか。

「……なんだ、今度は泣きそうな顔になって」

アキの表情に困惑が浮かぶ。

目の奥が痛い。けど俺は瞬きをしきりに繰り返して痛みを和らげ、耐え続けた。

「おまえはほんとに呆れるな……どうせ男同士なんて憧れの延長みたいなもんだろ。泣くような相手をいつまでも追いかけてるぐらいだったらさっさと諦めて、昨日のあの友だちみたいな奴とお付き合いごっこしてた方が気楽だろうが」

……もうなにも言い返せなかった。心に大きな穴が開いて冷たい風が通っているみたいだ。なんでごっこなんて言うんだ。俺の気持ちはそんなにままごとじみたものなんだろうか。

俺はアキの手から逃れて俯いた。力んでいないと表情が崩れてしまいそうだから奥歯を思いきり噛んで目を閉じる。

「おい」とアキが俺の肩を叩く。苦しくてしかたない。肩をゆさゆさ揺すぶって「こつちを向け」と命令してくるからその手をまた払ったら、アキの口から大きなため息がこぼれた。

嫌われた、と直感すると、

「ったく……だったら、おまえはどうしたいんだよ」

と、アキは俺を宥(なだ)めるように問うた。

こたえないともっと嫌われてしまうと考えた俺は、おずおず目を開けて返事を探す。

「……もう、アキと寝ない」

「ふうん。いいよ、それから？」

それから。

「たまにキスして。アキから。したくなった時」

「やだ」

間髪入れずに拒否られた。横で腕を組んでむっすりしているアキを睨む。

「“どうしたい” ってアキが訊いたんだろ」

「“なんでも願いを叶えてやる”とは言ってない。どうしておまえとキスしないといけないんだよ。したくなる時なんかこないぞ。それでいいなら話はべつだけだな」

「たまにちょっとぐらいいいじゃんか、帰り際だけでもっ」

「寝言言ってんじゃねえよ。なんでおまえにキスしたいと思うんだ。思うわけないだろうが」

「じゃあどうしてセックスの時はするんだよ」

「あれはサービスです」

アキの物言いに怒りが爆発しそうになって、思わず右手を振り上げた。でもアキは冷静に俺を見返したまま動かない。“殴れるなら殴ってみろよ”というその態度。

心の底から腹が立って腹が立って、悔しくて悔しくてどうしようもなかった。

愛しくて愛しくて、とめられなくて消せなくて、哀(かな)しくてしかたがなかった。

……観念して手をおろす。下唇を噛んでまたアキから視線を外して俯いた。そしてその言葉は、ほとんど無意識に口からでていた。

「もう、帰れよ」

言ってしまってから後悔した。

アキは無言で椅子から立ち上がると、机の上にあった筆記用具を鞆に投げ入れた。危機感が背筋を冷たく駆け抜けて戦(せん)慄(りつ)する。

本当にアキが帰ってしまう。本気で怒らせてしまった。

どうしよう。

支度を済ませたアキは鞆を肩にかけて俺の背後を歩いて行く。ドアが開いて、それからぱたんと閉まる気配。

全身からさっと血の気が引いて竦み上がった。別れるのはいいけど、いずれ別れるのはわかっているけど、俺が覚悟していたのはこんな喧(けん)嘩(か)別れじゃなくて、想いは実らなくてももっと違う別れ方で。

「……アキ、」

我に返った時には慌てて部屋を飛びだしていた。がむしゃらに走って階段を駆けおり、そこに見つけたアキの背中に大声で呼びかける。

「アキ!!」

腕にしがみついて叫んだ。

「ごめんなさいっ。……ごめんなさい、帰らないで！」

正直に謝った途端、これまで堪えていた涙が目の縁に溢れでてきた。その顔をアキの肩先に押しつけて、必死でアキの腕を抱き締める。

俺にとっては最初で最後の素直な訴えだったし、初めてアキに見せた本心だった。アキを想う俺の心の弱い部分。アキだけが俺の弱味で、アキだけが俺を動かしているというたった一つの想いだ。

それなのにアキは俺の頭に手を置いて、

「遅いぞ、とめに来るの」

と言った。いやらしく嬉しそうな声で。

俺は真っ白になった。……こんな必死の行動すら見透かされて、ばかにされている。

愕然として、脱力して、アキから手を離して部屋にのろのろ引き返した。

「こら、待てよ」

アキが追いかけてくる。

「美里、」

俺はもうなにもかもどうでもよくなって、とにかくこんな顔は見られたくないと思った。そんなことしか考えられなかった。部屋へ入ると、アキに肩を掴まれてよろけた。そのまま横にあったベッドに座らされて、

アキも隣へ来る。

俺が両手で顔を覆ったら、

「泣くなよ」

とアキが俺の頭をわしわし撫でた。

嫌だった。全部嫌だった。

アキを想うのも、嫉妬するのも。

からかわれるのも、ばかにされるのも。喧嘩するのも。

嫌いになれないのも。嫌われるのが怖いのも。

優しくされるのも。一緒にいるのも。

別れるのも。

嫌だ。

「……なにもいないから。受験が終わるまで、俺といってください」

両手をおろして懇願したら、涙が一粒膝(ひざ)の上に落ちてジーンズに染みた。

一番恐かったのは、こんなふうにあキを振りまわして愛想を尽かされることだったのかもしれないと、この時になってやっと気がつく。

アキはなにを思ったのだろう。

真意はわからなかったけど、俺が落ち着くまでの長いあいだ、俺の肩を引き寄せて宥めるように抱いたまま横に寄り添っていてくれた。

本文 p74～81 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>